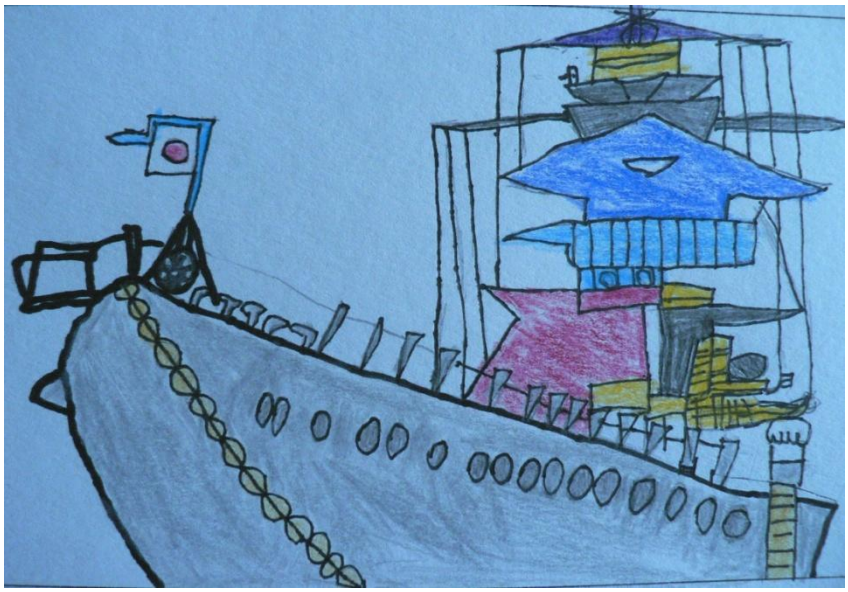
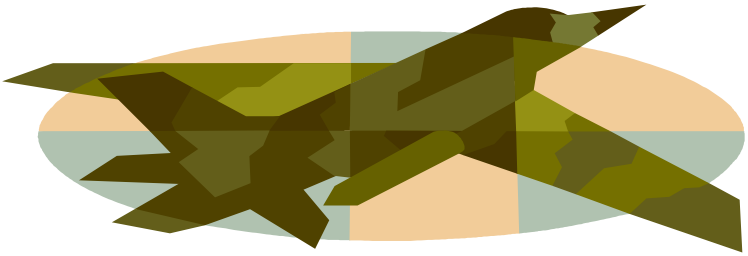
僕は、国語の勉強で歴史について色々勉強してきました。僕は前「アジア・太平洋戦争」のことを本で調べてみました。

１９３７年（昭和１２年）に始まった、日中戦争のころから、日本軍のことを「皇軍」というように呼ばれるようになり、新聞などで、大日本帝国憲法（明治憲法）のもとでは、日本は神の国とされていた。そして天皇は神の子孫でありしんせいで、おかすことのできないものとされていた。神の子孫である天皇の軍隊ですから、兵士は、天皇の命令を聞き、命がけで戦わなければなりません。ま争ですから、正義の戦いであり、必ず勝つ戦いです。「皇軍」という呼び方には、そのような意味がこめられていました。兵士が持っている小銃には、天皇家の紋章である「菊のご紋章」がついていました。日本の軍隊が、天皇の軍隊であることを自覚させるためです。また、天皇からあたえられた武器として、大切にさせるためです。軍隊生活の中で、小銃みがきは、もっとも大切な日課であり、終わった後には、厳しい点検がありました。よごれが残っていたりすると、「天皇陛下に申し訳ない」といって、銃をささげてたたされたり、なぐられたりしました。「小銃は兵隊泣かせ」と言う言葉があるほどで、兵士は小銃のあつかいで苦労したのです。陸軍の連隊旗には、朝日がえがかれ、さおの先に菊のご紋章がついていました。天皇が、各連隊にあたえたものとして、儀式の時には全員が敬礼しました。戦争の時には命がけで守り、敵にうばわれたりしたら、死んでおわびしなければなりませんでした。海軍の軍艦のへさきにも、この菊のご紋章がついていました。天皇の軍艦をしずめられたときには、環境は、軍艦とともにしずむのがならわしでした。